

道元禪師と宏智頌古(三)

黒丸寛之

第四十三則 羅山起滅

挙、羅山問ニ巖頭、起滅不停時如何。頭咄云、是誰起滅。

この本則について『宏智頌古』では

斫^ニ断老葛藤^一 打^ニ破狐窠窟^一 豹披^レ霧而變^レ文 竜乗^レ雷而換^レ骨
咄 起滅紛紛は何物

と頌して、初めの二句に巖頭の一咄を称え、次の二句に羅山の心地開明を賞讃するとともに、結びの句には起滅紛紛の当体を指摘することによって本来の面目を示している。

道元禪師は『海印三昧』の巻に「古仏言、起滅不停時如何」としてこの問を提起し、

しかあれば起滅は我我起、我我滅なるに不停なり。この不停の道取、かれに一任して弁肯すべし。この起滅不停時を仏祖の命脈として断続せしむ。起滅不停時は是誰起滅なり。是誰起滅は、応^テ以^ニ此身^一得度^上者なり、即現^ニ此身^一なり、而為說法なり、過去心

道元禪師と宏智頌古(三) (黒丸)

不可得なり、汝得^ニ吾髓^一なり、汝得^ニ吾骨^一なり、是誰起滅なるゆゑに。

と述べて、この起滅不停時を仏祖の命脈として拈提し、起滅を念起念滅の相として内観するにとどまらず、即現此身而為説法の大自在底のはたらきとして提唱されていることが知られる。宏智の頌では「起滅紛紛は何物」の結句に明らかのように、起滅を禪定の中に於いて観照的に捉えていると見られるのに対して、海印三昧の巻では、それを仏祖の慧命として本証上に展開されていることが明瞭である。

第四十七則 趙州栢樹

第四十九則 洞山供真 前号論集所収

第五十二則 曹山法身

第五十三則 黄檗墮槽

挙、黄檗示^レ衆云、汝等諸人尽是墮酒槽漢、与麼行脚何処

有_二今日_一、還知_二大唐國裏無_二禪師_一麼。時有_レ僧出云、只如_二諸方匡_レ徒領_二衆又作麼生_一。槩云、不_レ道_レ無_レ禪只是無_レ師。

宏智の頌古は次のようである。

岐分糸染太勞勞 葉綴花聯敗_二祖曹_一 妙握_二司南造化柄_一
水雲器具在_二甌陶_一 屏_二割繁碎_一 剪_二除翳毛_一 星衡藻鑑
玉尺金刀 黃槩老察_二秋毫_一 坐_二斷春風_一不_レ放_レ高

初めの二句に当時の禪弊を指摘し、次いで黃槩為人の手腕を賞するとともに、言外に默照の禪風が詠まれている。

道元禪師は『永平広録』巻一にこの公案を挙げた後、

師良久云、不_レ道_レ無_レ禪、已三十年、只是無_レ師、自_二自齊_一肩。

とのべて、黃槩のいう「禪なしとは道わず、只是れ師なし」の真意は、坐禪三昧にあることを明らかにしている。因みに、この公案に対する『雪竇頌古』(第十一則)は次の如くである。

凜凜孤風不_二自誇_一 端_二居寰海_一定_二竜蛇_一

大中天子曾輕触 三度親遭_レ弄_二爪牙_一

頌の第一・二句に黃槩の孤高の禪風を称え、第三・四句に大中天子すなわち唐の宣宗に対する黃槩の鉗鎚をのべている。したがって、雪竇頌古は禪機の卓抜なる点を称讃していると見られ、この頌からは黃槩のいう「只是無_レ師」の師は、いわゆる師匠の意味である。故に『永平広録』の「只是無_レ師、自_二自齊_一肩」という、坐禪三昧の自己の意味とは観点の相違

が存するであろう。

第五十四則 雲巖大悲

挙、雲巖問_二道吾_一、大悲菩薩用_二許多手眼_一作麼。吾云、如_二人夜間背手摸_二枕头_一。巖云、我会也。吾云、汝作麼生会。巖云、徧身是手眼。吾云、道即大嚮道、即得_二八成_一。巖云、師兄作麼生。吾云、通身是手眼。

宏智の頌に

一竅虛通 八面樞樞 無_レ象無_レ私春入_レ律 不_レ留不_レ礙月行_レ空
清淨宝目功德臂、徧身何_二似通身_一是_一 現前手眼顯_二全機_一 大用縱
横何忌諱

とあり、頌の前半に大悲觀世音菩薩の妙用をたたえ、後半には雲巖と道吾の優劣のない対応と、即今の觀音三昧の境地を示している。

道元禪師は『正法眼藏觀音』の劈頭にこの公案を掲げ、道得觀音は前後の聞声ままにおほしといへども、雲巖・道吾にかず。觀音を參学せんとおもはば、雲巖・道吾のいまの道を參究すべし。

と述べて、次に雲巖と道吾の道取するところを一句毎に提唱し、末尾には

雲巖・道吾の觀音は許多手眼なり、しかあれども多少の道にはあらず。雲巖・道吾の許多手眼の觀音を參学するとき、一切諸仏は

観音の三昧を成八九成するなり。

として、この公案の本質を明らかにされているが、さらに奥書の示衆日の後には

いま仏法西来よりこのかた、仏祖おほく観音を道取すといへども、雲巖・道吾におよばざるゆゑに、ひとりこの観音を道取す。

と再説し、永嘉・麻谷・臨濟・雲門・百丈等の道取を証明として「みな与レ仏同参なり、与レ山河大地ニ同参なりといへども、なほこれ許多手眼の一二なるべし」と述べて、雲巖・道吾のいうところが観音三昧の真髓であることを強調されている。

第六十一則 乾峰一画

拳、僧問ニ乾峰ニ、十方薄伽梵一路涅槃門、未審路頭在ニ甚麼処。峰以ニ拄杖ニ一画云、在ニ這裏。僧拳問ニ雲門ニ、門云、扇子踰跳上ニ三十三天ニ、築着帝釈鼻孔ニ、東海鯉魚打一棒、雨似ニ盆傾ニ、会麼会麼。

宏智頌古にこの本則の宗旨を

入レ手還將ニ死馬ニ医 返魂香欲レ起ニ君危ニ 一期拶ニ出通身汗ニ 方信儂家不レ惜レ眉

と詠んで、第一句と第二句に乾峰と雲門の起死回生の活作略を称え、第三句と第四句に学人に対する提撕を与えている。

道元禪師は『正法眼蔵十方』に、乾峰の語を挙げて

道元禪師と宏智頌古(三)(黒丸)

いはゆる在遮裏は十方なり、薄伽梵とは拄杖なり、拄杖とは在遮裏なり、一路は十方なり。しかあれども、瞿曇の鼻孔裏に拄杖をかくすことなかれ、拄杖の鼻孔に拄杖をかくすことなかれ、拄杖の鼻孔に拄杖を撞著することなかれ。しかもかくのごとくなりとも、乾峰老漢すでに十方薄伽梵一路涅槃門を料理すると認ずることなかれ、ただ在遮裏と道著するのみなり。在遮裏はなきにあらず、乾峰老漢はじめより拄杖に瞞ぜられざらんよし。おほよそ活鼻孔を十方と参学するのみなり。

と拈提して、「十方」すなわち尽十方界の真実は、乾峰のいう在遮裏を出身する活鼻孔として、真実人体のはたらきを示している。

第六十二則 米胡悟不

拳、米胡令ニ僧問ニ仰山ニ、今時人還仮レ悟否。山云、悟即不レ無、争ニ奈落ニ第二頭ニ何。僧廻拳ニ似米胡ニ、胡深肯レ之。

この公案について宏智頌古には

第二頭分レ悟破レ迷 快須ニ撒レ手捨ニ筌蹄ニ 功兮未レ尽成ニ駢拇ニ
智也難レ知覺ニ噬臍ニ 兎老氷盤秋露泣 鳥寒玉樹曉風凄 持来大仰弁ニ真仮ニ 痕玷全無貴ニ白珪ニ

と詠まれているが、それは悟にはこる熱氣も理にかなう知見も、全くその痕跡さえとどめない寂靜の境地を表現したものである。

道元禪師は『正法眼蔵大悟』にこの本則を挙げて、一句毎に宗要を示している。かなり長文であるから要旨のみを摘出すると、まず「今時の人」というについて、

いはくの今時は人人の而今なり……人の分上はかならず今時なり、あるひは眼睛を今時とせるあり、あるひは鼻孔を今時とせるあり。

と初めに述べて而今の意味の重さを示し、次いで

還返_レ悟否、この道をしづかに参究して胸襟にも換却すべし、頂顚にも換却すべし……今時人のさとりは、いかにしてさとれるぞと道取せんがごとし。たとへばさとりをうといはば、ひごろはなかりつるかとおぼゆ。さとりにきたれりといはば、ひごろはそのさとりのいづれのところにあるぞとおぼゆ。さとりとなれりといはば、さとりはじめありとおぼゆ。かくのごとくいはず、かくのごとくならずといへども、さとりのありやうをいふときに、さとりをかるやといふなり。

として「還つて悟りを返るや否や」という問が、さとりのありやうを問取する適切な問であることを明らかにしている。

そして、次に仰山のいう「悟りは即ち無きにあらず、第二頭に落つるをいかんせん」との道取について、

さとりといふは、第二頭におつるをいかんがすべきといひつれば、第二頭もさとりなりといふなり……しかあれば、第二頭におつることをいたみながら、第二頭をなからしむるがごとし。さとりのなれらん第二頭は、またまことの第二頭なりともおぼゆ。

とのべて、第二頭るときはそれがさとりのありやうとして絶対の真実であり、第一頭のみがさとりであるかの如く思う見解を斥けている。すなわち、第二頭あるいは百千頭に落在するときも、それが而今の事実として絶対なのであり、絶対的事実として何れるときもさとりであるとする「大悟」の説示は、道元禪の本質を示すものとして注目すべきであらう。

また『永平広録』巻九には、右の公案について次の頌古が存する。

正偏易_レ弁今人悟 空劫已前自己蹤 将_レ錯等閑雖_レ就_レ錯 東西付
囑密相逢

第六十八則 夾山揮劍

挙、僧問_ニ夾山_一、撥_レ塵見_レ仏時如何。山云、直須_レ揮_レ劍、若不_レ揮_レ劍漁父棲_レ巢。僧挙問_ニ石霜_一、撥_レ塵見_レ仏時如何。霜云、渠無_ニ国土_一何処逢_レ渠。僧廻挙_ニ似夾山_一、山上堂云、門庭施設不_レ如_ニ老僧_一、入理深談猶較_ニ石霜百步_一。

宏智頌古には

払_レ牛劍氣洗_レ兵威 定_レ乱帰功更是誰 一旦氛埃清_ニ四海_一 垂_レ衣
皇化自無為

と頌して、夾山の揮劍に見られる越格の力量を称え、その功の帰するところを示している。道元禪師は『永平広録』巻三

の上堂語に、夾山の語を挙げて次のようにのべている。

上堂。夾山因僧問、撥_レ塵見_レ仏時如何。山曰、直須揮_レ劍、劍若不揮漁父_レ巢。師曰、若是永平、又且不_レ然。或有_レ人間_二撥_レ塵見_レ仏時如何_一、祇對_レ他道。不_レ勞_レ懸_二石鏡_一、天曉自鷄鳴、喫飯喫茶、出入同門。

劍を揮うことを強調した夾山に対して、禪師はいわば劍を収めた世界を表している。それは、宏智頌古でいえば、第三・四句の境界上に展開する喫茶喫飯・出入同門のはたらきをのべたものであるから、宏智頌古が劍を揮うことを肯定した上で太平無事の世界を述べているのに比すれば、さらに一段の転開を示したものであるということができであろう。

第七十則 進山問性

拳、進山主問_二修山主_一云、明知_二生不生性_一、為_二甚麼_一為_二生之所_レ留。修云、筍畢竟成_レ竹去、如今作_レ篋使還得麼。進云、汝向後自悟去在。修云、某甲只如_レ此、上座意旨如何。進云、這箇是監院房、那箇是典座房。修便礼拝。

宏智頌古には

豁落亡_レ依 高閑不_レ羈 家邦平帖到人稀 些些力量分_二階級_一 蕩蕩身心絶_二是非_一 是非絶 介立_二大方_一無_二軌轍_一

と詠じ、また永平広録（卷一）には本則を挙げて後、

道元禪師と宏智頌古（三）（黒丸）

師良久云、公案現成三四尺、羅籠新結五千年。

と述べている。前者は本則の主旨にそって脱落底の風光を頌し、後者は公案自体の意味を明らかにしている。この本則に限らず、宏智頌古では公案の要旨をのべながら禪の境地を表すのが通例であるが、永平広録では一般に古則公案の本質的意義を直指されている場合が多い。

第七十八則 雲門餠餅

拳、僧問_二雲門_一、如何是超仏越祖之談。門云、餠餅。

餠餅云_二超仏祖談_一 句中無味若為參 衲僧一日如知_レ飽 方見雲門面不_レ慙（宏智頌古）

この頌では、雲門のいう所の餠餅の満喫（究尽）を勧めているが、その餠餅とは一体、何を意味するのであるうか。

道元禪師は『正法眼蔵画餅』のなかで、この語を取り上げて次のように述べている。

雲門匡真大師、ちなみに僧とふ、いかにあらんかこれ超仏越祖之談。師いはく、糊餅。この道取、しづかに功夫すべし。糊餅すでに現成するには、超仏越祖の談を説著する祖師あり、聞著せる鉄漢あり、聴得する学人あるべし、現成する道著あり。いま糊餅の展事投機、かならずこれ画餅の二枚三枚なり、超仏越祖の談あり、入仏入魔の分あり。

餠餅の展事投機は画餅の二枚三枚であると説かれるように、

それは画餅と同一事実をさすものである。それでは画餅とは何であろうか。

画餅といふは、しるべし、父母所生の面目あり、父母未生の面目あり。米麵をもちゐて作法せしむる正当恁麼、かならずしも生不生にあらざれども現成道成の時節なり、去來の見聞に拘牽せらるると参學すべからず。

もし画は実にあらずといはば、万法みな実にあらず。万法みな実にあらずば、仏法も実にあらず。仏法もし実なるには、画餅すなはち実なるべし。

と道取されるように、それは「米麵をもちゐて作法せしむる正当恁麼」としての吾々のいまの一動一静をいったものであることが明らかである。従つて、超仏越祖の談は、禪門においては徒らに高尚な理論ではなく、何の変哲もない日常の生活が、そのまま絶対の真実であることを示したものである。

また『永平広録』第六卷には次の上堂語が存する。

中秋上堂。雲門糊餅掛_二天边_一、喚作_二中秋月一円_一、睡覺起来無_二覓_一処、拾_レ頭忽地見_二青天_一。

第八十四則 俱胝一指

拳、俱胝和尚凡有_二所問_一只豎_二一指_一

この本則について、宏智頌古と永平広録の開演は次のようである。

(宏智頌古)

俱胝老子指頭禪 三十年来用不殘 信有_二道人方外術_一 了無_二俗物眼前看_一 所得甚簡 施設弥寬 大千利海飲_二毛端_一 鱗竜無限落_二誰手_一 珍重任公把_二釣竿_一 師復豎_二起一指云 看

(永平広録)

上堂。曰く、學道は須く道得道不得を知るべし。諸人、道得を得するや未だしや。若しまた未だ知らずんば、応に弁取すべし。諸人の道處、如何ぞ未だ道わざる。俱胝和尚一指頭の禪を拳して、師乃ち云く、其の後俱胝和尚、広く人天の為に說法し、横説豎説するに終に礙帶なし。或は仏を問うこと有らば便ち仏を道い、或は道を問うこと有らば便ち道を道う。乃至、黃を問えば黃を道い、黒を問えば黒を道う。加以、俱胝一代藏教を説くこと、己に三十六遍、八万法蘊を説くこと、八十一遍なり。七仏如来も俱胝の處分を得て說法度生し、二十八祖も俱胝の處分を得て說法度生す。諸人、俱胝老漢に相見せんと要す麼。弘子を豎起して曰く、看よ。俱胝老漢の說法を聴かんと要す麼。弘子を以て禪床を撃て曰く、聴く麼。既に俱胝と相見し了れり、俱胝の說法を聴き了れり。然も是の如くなりと雖も、指頭に向つて開口長舌なること莫れ。

(流布本卷三・原漢文)

宏智頌古・永平広録ともに俱胝の一指頭の禪を称揚しているが、とくに永平広録ではこれを仏法の道得として提唱し、學人各々にそれぞれ独自の道得のあるべきことが説示されている。仏法の参究において、その道得の独自性が強調され、またそれが開演されているところに、道元禪の特質を見るこ

とができると思う。

第百則 瑯琊山河

挙、僧問ニ瑯琊覚和尚ハ、清浄本然云何忽生ニ山河大地。覚云、清浄本然云何忽生ニ山河大地。

宏智頌古には

見有_レ不_レ有 翻手覆手 瑯琊山裏人 不_レ落_ニ瞿曇後_一

とあつて、瑯琊山慧覚の問処を道得とする活説法を称えている。

道元禪師は『正法眼蔵谿声山色』に

瑯琊の広照大師慧覚和尚は、南嶽の遠孫なり。あるとき教家の講師子璿とふ、清浄本然云何忽生山河大地。かくのごとくとふに、和尚しめすにいはく、清浄本然云何忽生山河大地。ここにしりぬ、清浄本然なる山河大地を、山河大地とあやまるべきにあらず。しかあるを、経師かつてゆめにもきかざれば、山河大地を山河大地としらざるなり。

と説き、また『永平広録』巻九にもこの問答を挙げて

春松秋菊順_ニ時節_一 蓋地蓋天現_ニ鏡空_一 竹影掃除塵転積 月穿_ニ潭水_一各融通

と頌している。宏智頌古では明らかに慧覚に焦点をおいているのに対して、正法眼蔵・永平広録では「清浄本然なる山河大地」を示していることが知られる。『谿声山色』の巻には

道元禪師と宏智頌古(三) (黒丸)

前文に続いて、

しるべし、山色谿声にあらざれば、拈華も開演せず、得髓も依位せざるべし。谿声山色の功德によりて、大地有情同時成道し、見明星悟道する諸仏あるなり。

と説かれて、谿声山色すなわち清浄本然なる山河大地の本来的意義が明らかにされている。道元禪師において、そしてまた真実の参学の漢にとつては、この山河大地——それは山色谿声であり、尽十方界である——こそ、父母未生前の面目であり、公案現成の世界であつたといわなければならない。

以上、宏智頌古の本則と、道元禪師の著述に共通して見られる公案について、それぞれの見方と拈提を考察したのであるが、その中で屢々道元禪師独自の見解を窺うことができた。それは、禪師が宏智の坐禅箴について「諸代の老宿のなかにいまだいまのごとくの坐禅箴あらず」(正法眼蔵坐禅箴)として推称しながらも、その末尾には「宏智禪師の坐禅箴それ道未是にあらざれども、さらにかくのごとく道取すべきなり」として独自の見解を示していることに象徴されるように、古則についても単伝の仏法よりする自受用三昧の境地を開演されたものと見る事ができるであらう。

道元禪師の公案解釈については、稿を改めて考察したいと思つている。